

『源氏物語』を読む

秋山虔・池田弥三郎・清水好子



読書マップ

『源氏物語』との縁

『源氏物語』への道

光源氏という人

『源氏物語』のなかの人生

光源氏の復活と栄華

『源氏物語』の内と外

女性群像をめぐって

「宇治十帖」の世界

「もののけ」論

『源氏物語』の成立・構成など

『源氏物語』の言語と表現

紫式部と宮廷生活

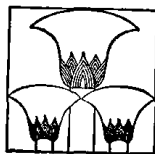
『源氏物語』を読むということ

文献案内

『源氏物語』を読む

秋山虔・池田弥三郎・清水好子

読書マップ



筑摩書房

出席者紹介

あきやまけん

秋山虔 1924年生まれ、東京大学文学部国文学科卒業、平安文学を専攻。現在、東京大学教授。

(主著)『源氏物語の世界』(東京大学出版会)、『源氏物語』(共著、日本古典文学全集 小学館)、『王朝女流文学の形成』(塙書房)、その他。

いけだ やさぶろう

池田弥三郎 1914年生まれ、慶応大学文学部国文学科卒業、日本文学を専攻。元慶応大学教授。1982年死去。(主著)『光源氏の一生』(講談社)、カラー『源氏物語』(淡交社)、『池田弥三郎著作集』10巻(角川書店)、その他。

しみずよしこ

清水好子 1921年生まれ、京都大学文学部国文学科卒業、平安文学を専攻。現在、関西大学教授。

(主著)『源氏の女君』(新書、塙書房)、『源氏物語論』(塙書房)、『紫式部』(新書、岩波書店)、『源氏物語の文体と方法』(東京大学出版会)、『源氏物語』(共著、新潮日本古典集成、新潮社)、その他。

文献案内作成者紹介

こばやしまさあき

小林正明 1950年生まれ、現在、東京大学大学院在学。平安文学を専攻。

1982年4月20日 初版第1刷発行

1983年1月30日 初版第2刷発行

著 者 秋山虔・池田弥三郎・清水好子

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2-8

振替 東京 6-4123 Tel. 291-7651 (営業) 294-6711 (編集)

郵便番号 101-91

印刷・理想社 製本・永興舎

0021-06004-4604

Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担でお取替いたします。

楽しい鼎談

秋山虔さんと清水好子さんと三人で、夏休みのある時、二日ほど信州の山中に籠って、『源氏物語』のことを話し語りしゃべり合った。今思い出しても楽しい鼎談であった。そして、その楽しさが、縁あってこの本を読まれる方々に伝わると思えば、この本は、出発点においてその目的に叶うものとなったと、言うことが出来ると思う。お二人の源氏学の造詣に支えられて、鼎談は決してただ楽しいだけのものに終ってはいないが、それは読者のこれ以後の読みに任せられているところである。『源氏物語』の大きさに比例して、『源氏物語』の持っている問題も、ますます広く大きくわれわれの前に拡がっている。その未開発の曠野に、読者はこの本を手がかり足がかりとして、思いのままに自由な探索を試みていただきたいと思う。

秋山さんも清水さんも、今や押しも押されぬ『源氏』研究の第一人者で、秋山さんはすでに全訳の仕事地完成され、清水さんのもまもなく完成するであろう。それぞれユニークな立派な業績である。そういうお二人にまじって、この鼎談に参加したわたしの役割りは、話の進行、展開に対する潤滑油的な役割りであったが、それはお二人の有効な受け止めによって、研究鼎談としてのこの談合の意義を一段と深めることが出来たように思う。わたしの全く素人臭い、野次馬式の差し出口に対しても、お二人の学識と蘊蓄とは、それをきっかけに、ゆるがせにできない源氏学の問題として、再提出してもらえた、ということになっている。

あるいはそういうところの問答の蔭に、意識した、もしくは意識していない、問題解釈の行き違いやすれ違いもないわけではない。つまり、提起された問題について、三人が常に浅いところで妥協しているわけではなく、そこにまた新しい問題の発起もあるように思われる。その点についても、読者は興味深い問題に行き逢うことができるだろう。

源氏学は、『源氏物語』が古典である以上は、何と言っても訓詁註釈を土台とし、出発点としなければならない。これは当然のことだが、古典であるために、その作品を成り立たせている背景の生活と、われわれ今日の読者の生活との間には、越え難い溝がある。われわれは源氏学の知識を基礎にして、できるだけその溝を埋めていかなければならない。具体的に言えば、古典をわれわれから離れたところにあるものとして読み解いていくことから一歩進んで、当時の人たちはこれをどう読んだかということに迫っていかねばならない。

その人たちはどういう人たちであつたか。あの時代にあつて、あの社会にどう生きた人であつたかということから、『源氏物語』の描いた人間関係、社会事象を明らかにしていくことはもちろんだが、さらに『源氏物語』が書かなかつたことについても、考えを深めていかなければならない。

読み方によっては、『源氏物語』は王朝の貴族生活について、豊かな資料を提供してしてくれる。文学作品なのだから、歌を始めとして、言語・詞章について大事な資料であることは言うまでもないが、怨霊信仰の資料としても、欠くべからざるものを提供している。婚姻、恋愛、あるいは贈答、さらには衣食住全般にわたって、貴重な資料となるものがそこに記されている。あるいは、当時の貴族階級の年中行事、人生行事を始め、「源氏物語芸能史」が叙述されそうな材料も多く記されている。それらは、一つ一つ、われわれに大きな興味を抱かせ、学問研究の世界に導いてくれる。

そして、われわれ『源氏物語』の読者は、最後に、それら一切を忘れて、再び一介の読者に戻らなければならぬだろう。『源氏物語』は言うまでもなく文学作品であり、しかもそれは、近代の自然主義の洗礼は受けていない。目前の社会、過去の歴史的事実を直叙したものではない。そこには多分に絵空事もあり、歌虚言^{うたせうごん}もある。それらをそのまま、素直に素朴に受け入れる読者であることが、最後に要望されるであろう。

われわれ三人が、話し語りしゃべり合った楽しさもまた、その最後の段階にある読者としてのそれであった。その楽しさを、この本の読者も十分に読みとっていただきたいと思う。

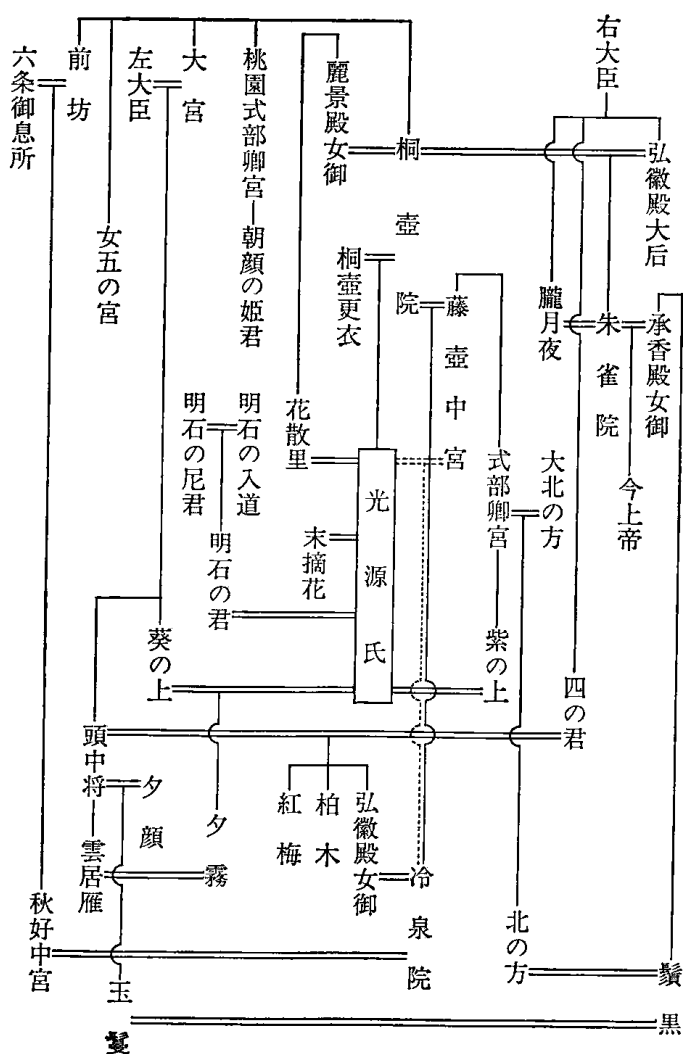
この本の基となった過日の鼎談の後、書肆の希望に沿って、こうした形にまとめあげる仕事は、鼎談が自由奔放であっただけに、実は大変な努力を必要とする仕事だった。わたしは全く手をこまねいて、その大変な仕事を秋山さんにおしつけてしまった。内心忸怩たるものがあるが、また、整理の段階でわたしが余計な差し出口は控えたほうがよかったと、勝手な自己弁護をしているわけでもある。

昭和五十七年二月

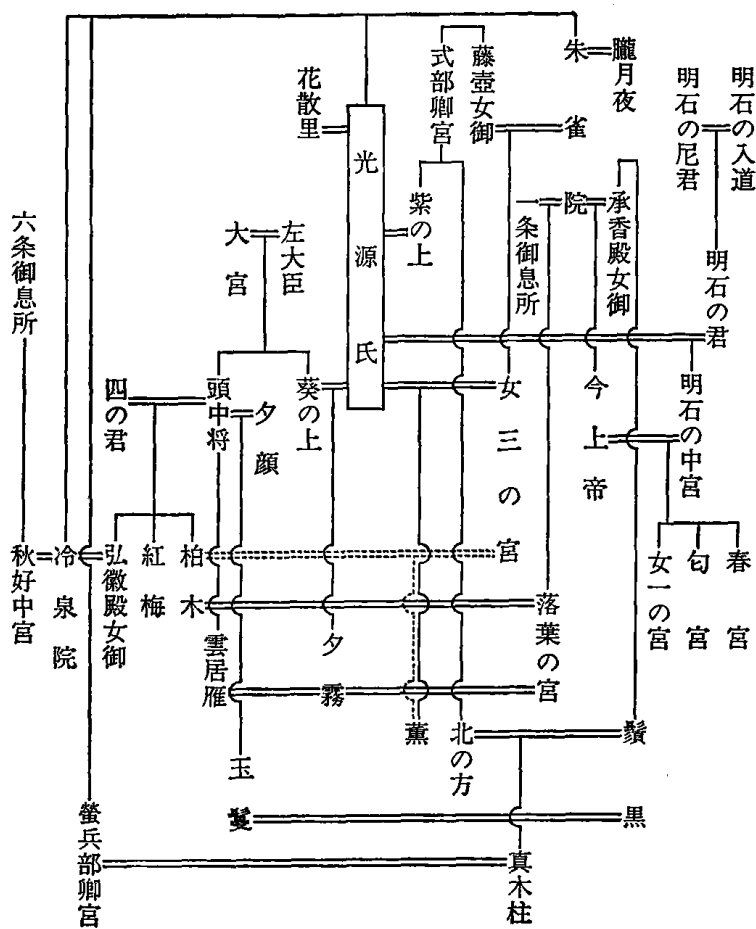
池田弥三郎

『源氏物語』（三部立て） 主要人物関係図

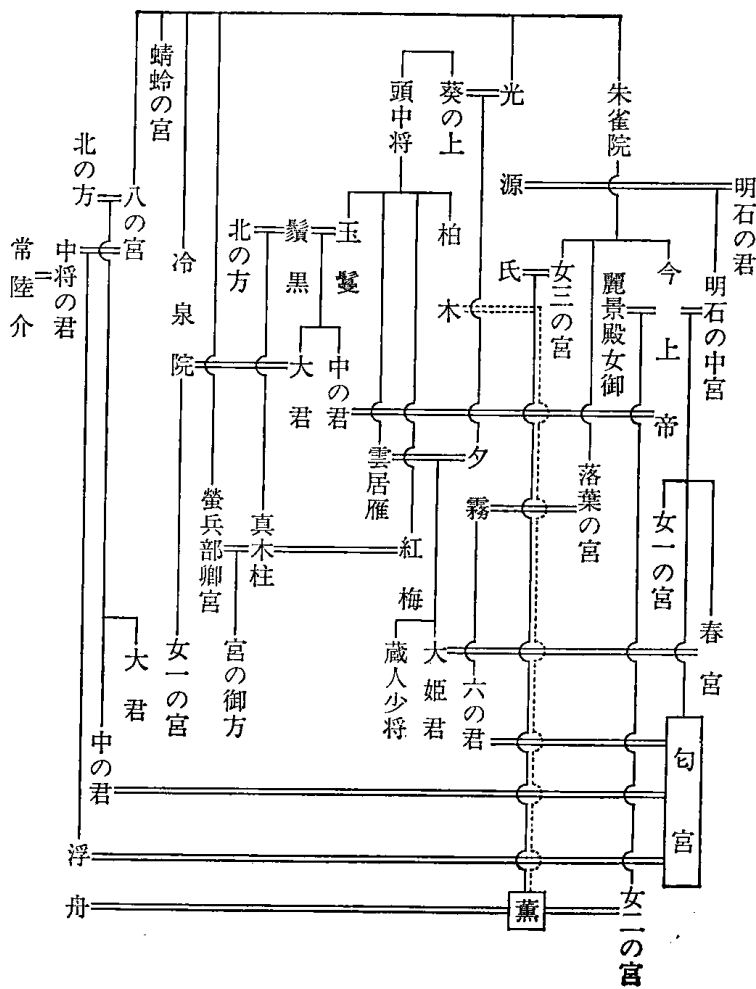
◇第一部（桐壺・藤裏葉）

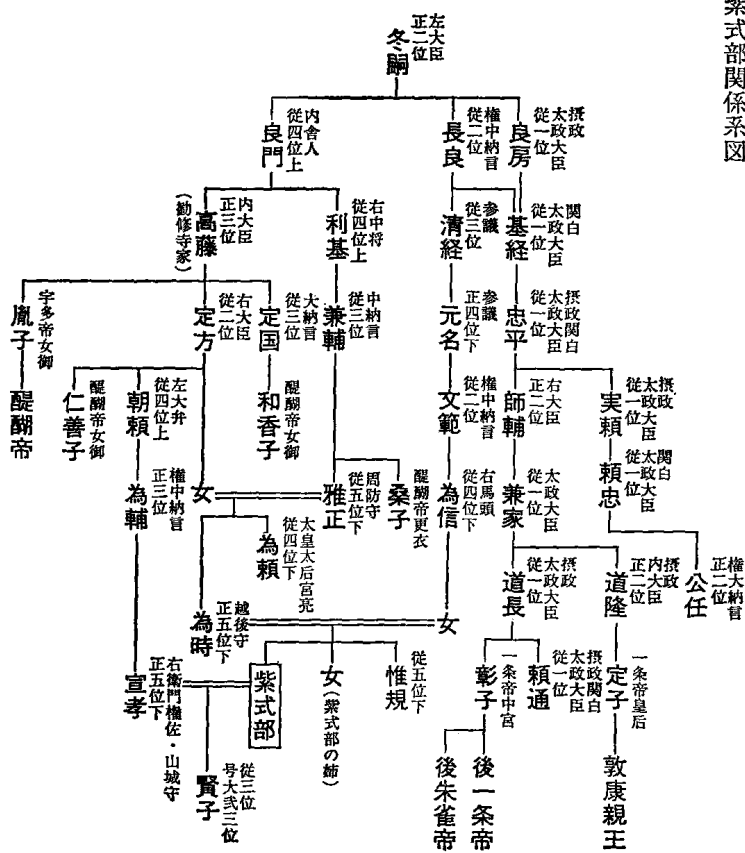


◇ 第二部(若菜上〜幻)



◇ 第三部 (匂宮・夢浮橋)





目次

楽しい鼎談……………池田弥三郎

『源氏物語』（三部立て）主要人物関係図
紫式部関係系図

一 『源氏物語』との縁……………三

戦時中の『源氏物語』(一) 『源氏物語』との出会い(二) 折口信夫の『源氏』講義(三)
戦後の『源氏物語』の流行——昭和二十年代(三) 折口源氏(四)

二 『源氏物語』への道……………九

『源氏物語』の読み方(一) 『源氏物語』を読むための参考書(二) 現代語訳について(三)

三 光源氏という人……………三五

「女にて見まほしう」(一六〇) 光源氏の美しさ(一六〇) 万能の人 光源氏(一六〇) 親王と源氏と
(一六〇) 左大臣家の賭け(一六〇) 物語の主人公(一六〇) 光源氏の性格(一六〇)

四 『源氏物語』のなかの人生……………五五

出会いと犯し(一六〇) 傍役、頭中将(一六〇) 『源氏物語』の残酷さ(一六〇) 須磨・明石の流離(一六〇)

五 光源氏の復活と栄華……………七

帰って来た光源氏(七) 光源氏と頭中将(七) 法華八講(七) 密事の後始末(七) 藤壺
中宮の動静(七)

六 『源氏物語』の内と外……………六

貴族の落胤たち(六) 離別の作法(六) 治世の交替(六) 女の身分(六) 明石の君の例
(六) 『光源氏』について(六)

七 女性群像をめぐる……………一〇

桐壺更衣(一〇) 弘徽殿女御(一〇) 葵の上(一〇) 朧月夜の君(一〇) 朝顔の姫君(一一)
源典侍(一二) 六条御息所(一) (一二) 秋好中宮(一二) 六条御息所(一) (一二) 玉鬘(一二)
女三の宮——付朱雀院(一二) 紫の上(一二)

八 「宇治十帖」の世界……………一四

「宇治十帖」の世界と作者(一四) 「宇治十帖」の巻々の特徴(一四) 大君という人(一五)
宇治への道(一五) 古宮の姫君とその庇護者(一五) 薫と匂宮(一六) 『浮舟』という名の
女(一六)

九 「もののけ」論……………一七

生霊の発動(一七) 『権記』の記事若干(一七) 怨霊のルール(一七) もののけの成立(一八)
陰陽道の働きかけ(一八)

十 『源氏物語』の成立・構成など……………二八五

巻立てと巻名(二六) 構想と創作方法(二七) 二部仕立てか三部仕立てか(二八) 時代の設

定(二九) 加筆者の問題(三〇) 異系統の本文(三一) 『宇津保物語』などにふれて(三二)

『源氏物語』の読まれ方(三三) 物語と史実(三四)

十一 『源氏物語』の言語と表現……………二八七

『紫式部日記』について(三六) 『源氏物語』の言語(三七) 『源氏』『枕』の文章の感覚(三八)

『和泉式部日記』にふれて(三九) 散文と引歌表現(四〇) 『源氏物語』の歌(四一) 作者介

入の表現(四二) 語る“文章”(四三) 卓越した表現力(四四) 思想性より表現性を(四五)

十二 紫式部と宮廷生活……………二八九

一条天皇の時代(四六) 物語と絵と(四七) 女房の生活——付綿と氷と(四八)

(四九) 『源氏物語』の執筆(五〇) 「このわたりに若紫やさぶらふ」(五一) 紫式部の晩年

と死(五二) 紫式部の教養と旅(五三) 『栄花物語』と日記など(五四)

十三 『源氏物語』を読むということ……………二九一

文献案内……………二九二

鼎談を終えて……………二九三

小説としての『源氏物語』……………二九四

清水好子……………二九四

『御堂関白記』 ま
 『岷江入楚』
 『無名草子』
 や
 『大和物語』
 ら
 六国史

二九
 二
 三
 九
 五

『源氏物語』を読む

一
『源氏物語』との縁